

First Track

オリンピック特集を読む前に

文／本誌プロデューサー 大石裕久

スノースタイルは今月号のメイン特集をオリンピックと決め、取材を敢行し、オール38ページに及ぶ大特集にてまで作り上げた。オリンピックに至るまでの過程をよく知る古くからのスノーボード関連の友人たちは、もしかしたらスノースタイルのこの特集を快く思わないかもしれない。」結局スノースタイルは認めたわけだ。」と。だけどそれは違うと言いたいために、オリンピック特集をするスノースタイルの本音を語ってみたい。

今を遡ること20数年前、スノーボードは誕生した。当時はスノーサーフィンと呼ばれており、エッジもなにもない板だけで、ワーダーの

上を滑るぐらいしかできなかった。なぜ知名度がまったくないから、ゲレンデも規制しなくなかった。「なんか珍しい生き物がいるなあ」というのが思われていなかったのだ。

それから試行錯誤を経て、10数年前に今のスノーボードの原形ができるようになった。現在生産されているものとは見た目も質もずいぶん異なるが、エッジもパンティングモードはあった。当時、スノーボーダーは「スキーヤーのフィールドであるスキーワーク」を借りている立場上、自分達は外部者であることを自覚し、迷惑をかけないように気を遣いながら滑っていた。

スノーボード創世期のバイオニア達は「もっと大勢の人々にこの楽しさを知ってもらいたい！」

そんな純粋な想いから、金もうけとはかけ離れたところ、スノーボード普及と発展のために尽力してきた。未だ一般人が「スノーボード？」などと言っていた時代（1982年）、すでにJSBA（日本スノーボード協会）を発足させ、組織としての基盤づくりを始めた。大会を開催し、スクールを運営し、会員という形でスノーボーダー同士のネットワークを構築するなど、スノーボードの普及と発展の為に奮闘活動に乗り出した。スノーボーディングを心から愛し、その未来を信じた人達は、世界の偏見と無理解に負けず、ひたすら道を切り開いてきた。

そして、10年ほど前からはスノーボーダー

の数が急激に増加し、ゲレンデでもかなり目立つ存在になってきた。パイプもない当時は、最高の喜びであるワーダーを求めてリフト下を滑走したり、コース外に飛び出したり。たとえそれが少數であったとしても、正統なるスキーヤーに紛れこんだ異邦人の振る舞いは思ったよりも目立つもの。さらにはスノーボードには、反骨精神を身上とする、一種「不良」的な性質もあって、マナーを守る優等生ばかりではなかったのも事実。スノーボーダーの増加に比例して、スノーボード禁止のゲレンデは増えていった。

●空前のスノーボード・ブームの到来
そして4年ほど前に、スノーボードはかつてなかったほどのビッグ・ブームを迎える。バブ

ルがはじけた頃からスノーボーダーは毎年倍々ゲームで爆発的に増加していく。ストリート・カルチャーの台頭、スキーナンバーチャンピオン、スノーボード関係者のひたむきな努力の結果etc…様々な要因が考えられる。

景気の低迷を背景に、猛烈な勢いで成長し続けるスノーボード市場は、ビジネスの格好のターゲットとなり始めた。状況はもともとが一変した。ボードメーカーの増加によって、ボードの選択肢も増えた。スキーヤーの集客が落ちてきたスキーワークはこれ幸いとばかりに、一気に「スノーボーダーさん、いらっしゃい」状態に転じた。規制によって滑走エリアを限定され、苦汁をなめていたスノーボーダー達は諸手を挙

げてスキーワークへなだれこんでいった。ただ、今みんながたくさんいるゲレンデでスノーボードを楽しむことができるのも、スキーワークにスノーボード開放を訴えてきた先駆者達の努力があったことは、心の片隅にとどめておいてほしいと思う。

ブームの始まりとともに從来のスノーボード業界以外の業者の参入が相次ぎ、スノーボードはビッグ・ビジネスの対象となっていました。

●長野五輪で正式種目に。しかし…
そんな折り、業界に衝撃ニュースが走る。94年6月28日、フランスはパリのIOC（国際オリンピック委員会）理事会でサマランチ会長が憲法発言。NAOC（長野オリンピック委員

会）に対し、「長野オリンピックでスノーボード競技の実施を検討してほしい」との要請だ。五輪憲章には「大会の7年前には種目を決定すること。その後の変更是原則的に認められない」という規定がある。長野五輪までは4年しかない。この規定に従えばスノーボードが競技として認められるのは2001年以降。つまり2002年のソルトレイクシティ大会から実施されるのが道理。ところが、1998年の長野五輪からスノーボードはFIS（国際スキー連盟）の運営のもとスキーの一種目として実施することが決まった。

なぜ、このような事態になってしまったのだろうか？

まず、正式種目として決定された経緒として、近年オリンピックが年を追うごとに商業主義色を強くしていった背景が挙げられる。テレビ放映、スポンサー料をはじめとする、あまりにも大きな利権…。オリンピックはスポーツの国民的行事であるとともに、最大のスポーツ・ビジネス市場でもあることは否定できない。夏季オリンピックに比べ、種目も少なく、ビジネス的に低迷する冬季オリンピック。よりスポンサーに受け、よりテレビ映えする人気競技が求められていた。活性化させるためのカントリルトとして、世界中で急激に人気を獲得しつつあったスノーボードに白羽の矢がたてられたとしか考えられない。

しかし、新たに競技種目を増やす為には、五輪憲章にも定められている通り7年前からの申請が必要。そこで、五輪憲章の規定をクリアする為にスノーボードは、スキー競技の一部という位置づけで、スキー種目として開催されることになったのだ。

●ISF、JSBAは運営を任せなかった

この「7年前に種目決定」規定の為に、名目上はFIS（国際スキー連盟）の名のもとに競技が執り行われるとしても、実際の運営はスノーボード協会が協力して仕切る、ということもできたはず。ISF（国際スノーボード連盟）、JSBA（日本スノーボード協会）からすれば、スノーボードという新興スポーツの地位を確立

し一般に定着させるためには、オリンピックは絶好の機会でもあったに違いない。

しかし、その願いはあっさりと却下された。理由は簡単だ。IOCの認可団体だけが、競技種目の運営団体として認められるのだが、ISF（国際スノーボード連盟）は認可されていなかったのだ。1989年に発足したばかりのISFは組織的にまだ未熟であり、政治力、財力もない為にオリンピック競技を運営する力がない、とみなされた見解もある。

通常、あるスポーツの競技人口はゆるやかに増加していく。それとともに業界も育てゆく。試行錯誤を繰り返しながら、少しずつ成長していくものだ。しかし、スノーボードはあまりに

も急激な成長を余儀なくされた。誰も追いつけないほどに。だから、成長のスピードに環境整備が付かないかった。スクールの整備、安全対策問題、大会運営…オリンピック前に組織として整えなければならないことが短期間に増えすぎた。言い換ればオリンピック出場を目指す一部のスノーボーダーより先に、1万人を越す（現在は2万人を超える）アマチュア会員の基盤作りを優先せざるを得なかつたはず。組織としての地盤固めもまだ充分ではなく、そんな成長の途中にあったスノーボード協会（ISF及びJSBA）は、スマランチ会長の一言をきっかけに、突然荒廻りに放りこまれても同然なのだ。しかも、組織の完成度という観点からスノーボード協会とスキーアクセスを比較することは見当違いだ。FIS（国際スキー連盟）、SAJ（全日本スキー連盟）は長い歴史で培われた確固たる体制を有しているのだから、組織として整備されているのは当然と言える。

●スノーボードはスキーではない

では、FISが運営することの問題點は何なのか？ それはスノーボードが唯一の独立した競技としてではなく、スキー種目、つまりスキーのカテゴリーのひとつとして行なわれるからだ。これはスノーボーダーのアインデンティティに関わる問題だった。スノーボードはスキーではない。スノーボードはスノーボードでしかないのだ。スノーボードはスノーボードを愛し、

その発展と普及を願う人達によって育てられてきたマインドがあふれるスポーツだ。ビジネスの為ではなく、純粹にスノーボードを愛する人々がから業界を育て、支えてきた。

「いつかスノーボードがオリンピック種目にならうすごいね」その夢は現実にならなかったが、スノーボーダーの手を離れ、完全なる部門別の手に全てはゆだねられてしまった。確かにシステムティックな運営はできることだろう。しかし、それは選手、ギャラリーをはじめ、大会に開催する全てのスノーボーダーがリレーに感じる大会でありえるのだろうか？ 韓国が同じく雪上で行われるからといって、スノーボードがスキーの種目として開催されることは許される

ことだろうか？ スノーボードとしてのアイデンティティーはどこへ行ってしまうのだろうか？

7年の準備期間があつたら、協会も組織基盤を整え、運営をきちんと行なえたかもしれない。しかし、商業主義色がよりいそぞう濃く見える長野五輪では、話題度アップの為にも早急にスノーボードが開催される必要性生じたとしか思えない。あまりにも時間は足りなく、急ぎすぎていた。

●FIS（国際スキー連盟）とISF（国際スノーボード連盟）が互たつの動き

五輪種目として決定された後、FIS主催のワールドカップが行なわれるようになつたのは皆

さんて存じの通り。ISFではなく、FISが主催する大会で獲得したFISポイントが、五輪選手を選出する際の重要な判断基準とされた。こうして、ISF主催とFIS主催による、2つのワールドカップが開かれるという異常事態が起きた。そして日本国内ではアマチュア大会の最高峰である全日本選手権もJSBA（日本スノーボード協会）とSAJ（全日本スキー連盟）により2つ開催されたのだった。これは選手、スノーボード関係者に混乱をもたらし、不信感をつのらせた結果になった。

オリンピックにおけるスノーボード競技が、FISとSAJのコントロール下に置かれることに反発して、一時期JSBAはレッドカードという

制度を導入したこともあった。JSBA以外が主催する大会に出場したプロ選手については、そのプロ資格（アマチュアについてはJSBA会員資格）を剥奪するという厳しさだった。しかし、オリンピックは世界中から各国の代表が参加する、国民の為の大スポーツ・イベントである。しかも長野五輪は、スノーボードが初めて正式種目として採用されるという記念すべき大会でもある。本來、五輪を盛り上げる立場であるのがホスト国の役割といえよう。その日本のスノーボード協会が盛り上がりに水を差す行為をするというのは、あまりにも矛盾があり、かつ国際的にも問題ではないだろうか？

そして実際に出場する選手の為にも、協会同

士の組織的なながらみで振り回されることがあつてはならない、という見解に達した。あくまでこれは組織としての問題であって、選手に罪はないのだ。長年にわたって第一線で活躍してきた選手の中には、年齢的に今しかない、といふ者も多かった。協会は早く決着をつけなければならなかった。スノーボードの為に尽力してきたのは協会が、世論を敵にまわしてまで反発することはあってはならない。このままではスノーボード界の将来の為にならない。そして、このままではオリンピックに実力のあるスノーボーダーが選出されない危険性も大きい。それはスノーボードに対する誤解を避ける為にもあつてはならない事態だった。

遂にISFとJSBAは、スノーボード協会としてオリンピック開催に協力することを決定した。そしてJSBAはレッドカード制度を撤廃した。

オリンピックという晴れの舞台にスノーボード界を代表する実力ある選手を送り出す為に、ISF・JSBA所属プロの選手会であったPSA（プロスノーボーダーズアソシエーション）ジャパンが立ち上がった。国内プロ選手はPSAジャパン所属という形式でオリンピックを目指すことになった。オリンピック出場のために反発を考えながらも便宜上容認する者、実力はありながらもスタイルの相違を理由にあえてオリンピ

ックを目指さない者…選手によって対応は様々だった。

オリンピック開催まではこういった経緒があったのだった。

●スノースタイルの韓国優勝

本誌は日本初のスノーボーディング専門誌として10年前に誕生した。我々もまた、愛するスノーボードを守り、育て、支えてきたという自負がある。オリンピックまでのこうした経緒の中、本誌も他人事ではなく、慎重に歩いてきたつもりだ。しかしながら我々は、国民的行事であるオリンピックの範囲と、単一競技開催の主張は、次元の異なる問題であると考えている。今回のスノーボード競技における組織上の開催

形態（スノーボードをスキーワークとしてのアイデンティティーはどこへ行ってしまうのだろうか？

7年の準備期間があつたら、協会も組織基盤を整え、運営をきちんと行なえたかもしれない。しかし、商業主義色がより濃く見える長野五輪では、話題度アップの為にも早急にスノーボードが開催される必要性生じたとしか思えない。あまりにも時間は足りなく、急ぎすぎていた。

●ISF（国際スキー連盟）とISF（国際スノーボード連盟）が互たつの動き

五輪種目として開催された後、FIS主催のワールドカップが行なわれるようになつたのは皆

さんて存じの通り。ISFではなく、FISが主催する大会で獲得したFISポイントが、五輪選手を選出する際の重要な判断基準とされた。こうして、ISF主催とFIS主催による、2つのワールドカップが開かれるという異常事態が起きた。そして日本国内ではアマチュア大会の最高峰である全日本選手権もJSBA（日本スノーボード連盟）とSAJ（全日本スキー連盟）により2つ開催されたのだった。これは選手、スノーボード関係者に混乱をもたらし、不信感をつのらせた結果になった。

オリンピックにおけるスノーボード競技が、FISとSAJのコントロール下に置かれることに反発して、一時期JSBAはレッドカードという

制度を導入したこともあった。JSBA以外が主催する大会に出場したプロ選手については、そのプロ資格（アマチュアについてはJSBA会員資格）を剥奪するという厳しさだった。しかし、オリンピックは世界中から各国の代表が参加する、国民の為の大スポーツ・イベントである。しかも長野五輪は、スノーボードが初めて正式種目として採用されるという記念すべき大会でもある。本來、五輪を盛り上げる立場であるのがホスト国の役割といえよう。その日本のスノーボード協会が盛り上がりに水を差す行為をするというのは、あまりにも矛盾があり、かつ国際的にも問題ではないだろうか？

●このままではいけはない

ところで4年後はソルトレイクシティで冬

オリンピックが開催される。スノーボードはきっとこの時も正式種目だろう。今回のハーフパイプ、ジャイアントスラロームに加え、ボーダーコース、デュアルスラローム、ワンメイク等の種目が追加されるという噂もある。その時、スノーボードは単一競技として開催されるのか、それとも相変わらずFISのコントロール下で行なわれるのか？

それは一般スノーボーダーであるみんなの問題意識にかかっている。どんなイベントであろう、やはりスノーボードの大会はスノーボーダーの手によってとり行なわれるべきだ。次のオリンピックにはまだたっぷり間がある。スノーボーダーの賞賛を浴びながら表彰台に上がる

こと、それがどんなに大切なことなのか、スノーボードが本当に好きなら、今いちど考えてみよう。スノーボーダーとしての自覚とマインドを持って、いっさいどうあるのがスノーボーダーにとってベストなのか。

スノーボードは生活の道具としてではなく、ただ純粹な遊びとして生まれた。そしてスノーボーディングには自分の好きな道に楽しめばいい、という自由さがある。ワーダー、フリーライディング、ハーフパイプ、ワンメイク、カーヴィング等etc…。大会もそうしたカテゴリーの一つに過ぎない。要は自分が楽しむように楽しめばいいのだ。オリンピックも世界選手権

も、こうしたカテゴリーのひとつとして楽しむべきもの。それを、よけいな問題が単純に楽しめなくなさせている。

ひとりひとりの問題意識が高まってゆけば、世論を動かして、世界を変えることができる。こんなに楽しいスノーボーディングなのだから、もう一回考えて喰らうよ。

オリンピック特集を読んで、少しはそんな気持ちになっていただければ本望だ。